

令和元年6月21日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26463377

研究課題名（和文）食物アレルギー乳幼児の家族エンパワメントと看護師エンパワメント教育モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a family empowerment model for raising children with food allergy and a nurse empowerment education model

研究代表者

秋鹿 都子（AIKA, satoko）

島根大学・学術研究院医学・看護学系・准教授

研究者番号：90342279

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：食物アレルギー児の家族の食物アレルギー対応力の実態とその影響要因について、家族を対象に質問紙調査を実施した。また、小児看護に従事する看護師を対象に、食物アレルギーの知識と食物アレルギー児の家族への看護実践について質問紙調査を実施した。さらに小児アレルギーエデュケーターである看護師を対象に、高度なアレルギーの専門知識と指導技術をもった看護師による、食物アレルギー児の家族に対する看護の実際について、面接調査を実施した。これらの調査で得られた結果をもとに、食物アレルギー児の家族への看護ケア方法を考案し、看護師教育プログラムを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、食物アレルギー児家族の食物アレルギー対応力を養うための看護ケア方法を考案し、看護師教育プログラムを作成した。看護の質の向上により、家族の食物アレルギー対応力が向上することは、QOLの向上につながる。また、食物アレルギー児の多くが受診する小規模医療機関に所属する看護師は、教育の場と機会に恵まれにくいいため、教育ニーズは高い。本プログラムは、そうした看護師の食物アレルギー児や家族に対する看護ケア能力の向上にもつながる。

研究成果の概要（英文）：We conducted a questionnaire survey of mothers about the actual condition and influence factors of the food allergy response capability of mothers raising children with food allergies. We conducted a questionnaire survey of pediatric nurses about food allergy knowledge and nursing practices for families with food allergy children. Furthermore, we conducted an interview survey of nurses who are child allergy educators about the practice of nursing children with food allergy who are nurses with advanced allergy expertise and instructional skills. Based on the results obtained in these surveys, nursing care methods for families who raise children with food allergies were devised, and a nurse education program was created.

研究分野：小児看護学

キーワード：食物アレルギー 家族

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

乳幼児時期にわが子が食物アレルギーであると診断を受けた家族の不安や衝撃は大きい。食物アレルギーによって引き起こされる症状の多彩さ、対処方法の複雑さ等から、十分な社会的理解や支援を受けているとは言い難く、食物アレルギーの子どものみならず、その家族が抱える負担や困難は多大である。特に食物アレルギーの治療は食事を中心とした日常生活に直結したものであり、その中心的役割を担うのは母親である。0歳から就学前の乳幼児期は一般的にも母親の育児負担が大きい時期で、そのような時期に食物アレルギーを有する乳幼児(以下、食物アレルギー児)の母親は、アナフィラキシーによりわが子の命が危険にさらされる不安や、症状の悩みを抱えながら、食事療法を日々続けなければならない。加えて、成長発達や疾患治療に関する不安や、経済的負担、社会的サポートの少なさ、周囲の人々との関係など、食物アレルギー児の母親の抱く不安や負担・困難感は大きく、生活の質(以下、QOL)の低下が指摘されている。先行研究において、食物アレルギー児の母親が食物アレルギーに対応した生活を円滑に遂行する能力(以下、食物アレルギー対応力)は、「ストレス対処」「除去食技術」「医療者からの情報収集」「食物アレルギーの知識」「夫の協働」の5要素で構成されており、食物アレルギー対応力の向上は、母親のQOLの向上につながることを示唆されている。そこで、食物アレルギー児の家族がわが子の食物アレルギーに対する不安や育児ストレス、困難感等を克服し、疾患や治療に関する知識・技術を高め、これを家庭内外で実践する力、すなわち、食物アレルギー対応力を養う看護ケアの方法を検討する必要があると考えた。また、食物アレルギー児の家族に最良の看護ケアが提供されるためには、最良の看護ケア方法を看護師に広く教育していく必要がある。そのため、本研究で検討する食物アレルギー児の家族への看護ケアの方法を看護師が習得し、実践できる力を高める教育方法についても検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、食物アレルギー児の家族が、食物アレルギーに対する不安や育児ストレス、困難感等を克服し、疾患や治療に関する知識・技術を高め、これを家庭内外で実践する力を養う看護ケアの方法(食物アレルギー児の家族エンパワメントモデル)を開発すること、また、その看護ケアを実践する力を獲得する看護師教育の方法(看護師エンパワメント教育モデル)を開発することを目的とする。

3. 研究の方法

- (1)食物アレルギー児の家族の食物アレルギー対応力の実態と対応力への影響要因について、家族を対象に質問紙調査を実施した。
- (2)小児看護に従事する看護師を対象に、食物アレルギーの知識と食物アレルギー児の家族への看護実践、認識について質問紙調査を実施した。
- (3)小児アレルギーエデュケーターである看護師を対象に、高度なアレルギーの専門知識と指導技術をもった看護師による、食物アレルギー児の家族に対する看護の実際について、面接調査を実施した。
- (4)前年度までの調査で得られた結果をもとに、食物アレルギー児の家族への看護ケア方法を考案し、看護師教育プログラムを作成した。

4. 研究成果

- (1)食物アレルギー児の家族の食物アレルギー対応力の実態と対応力への影響要因

【方法】

医師により食物アレルギーと診断され治療を受けている0~6歳(就学前)の乳幼児を養育する母親を対象に自記式質問紙調査を実施した。質問紙は、小児科アレルギー外来を有する病院、一般小児科診療所、アレルギー専門小児科診療所の小児科医師を通じて配布し、郵送法で回収した。

調査内容は次の～である。対象者と児の背景、食物アレルギー対応力(ストレス対処、除去食技術、医療者からの情報収集、食物アレルギーの知識、夫の協働)の5因子17項目。「全くあてはまらない」1点～「非常にあてはまる」5点で、高得点ほど食物アレルギー対応力が高い。食物アレルギーによる日常生活への影響(子どもを連れて出かける上での制限3項目、子どもを他者に預ける上での制限3項目、食物アレルギーによる子どもの不安・心配3項目、食物アレルギーによるストレス2項目、周囲に対する認識2項目)。The World Health Organization Quality of Life-26 (WHOQOL26)日本語版(身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境領域の4領域と、健康状態への満足、QOLに対する主観的評価の計26項目。「まったくくない」「まったく不満」1点～「非常に」「非常に満足」5点、高得点ほどQOLが高い)看護師に対する認識。

分析は、背景による食物アレルギー対応力の比較はt検定、一元配置分散分析を用い、食物アレルギー対応力と背景、食物アレルギーによる日常生活への影響、QOLとの相関は、Pearsonの相関係数あるいはSpearmanの順位相関係数を求めた。また、QOLを従属変数とし、食物アレルギー対応力、食物アレルギーによる日常生活への影響、健康状態(母親、食物アレルギー乳幼児、家族)、除去品目(鶏卵、牛乳、小麦)、アナフィラキシー経験、受診施設、転医経験を独立変数とする重回帰分析(Stepwise法)を行った。母親の看護師に対する認識の受診施設に

よる比較は、Kruskal Wallis 検定を用い、食物アレルギー対応力と看護師に対する認識との相関は、Spearman の順位相関係数を求めた。

【結果】

分析対象とした 280 名(有効回答率 45.0%)の食物アレルギー対応力の全体スコアは、 3.42 ± 0.55 であった。因子別のスコアは、「ストレス対処」が 2.96 ± 0.86 、「食物アレルギーの知識」が 3.44 ± 0.74 、「医療者からの情報収集」が 3.45 ± 1.03 、「除去食技術」が 3.57 ± 0.96 、「夫の協働」が 3.70 ± 1.00 であった。17 項目のうち最も高スコアだったのは、「食品に記載されたアレルギー表示の見方が分かる」 4.06 ± 0.91 であった。また最も低スコアだったのは、「原因食物の除去・解除を行う判断が医学的にどのようにして行われるのか知っている」 2.75 ± 1.00 であった。食物アレルギー対応力は、母親・家族の健康状態、除去品目(小麦・牛乳)除去品目数、アナフィラキシー経験、受診施設と関連しており($p < 0.05 \sim 0.01$)食物アレルギー対応力の低い母親の方が高い母親より育児や生活全般上のストレス、子どもを連れて出かける不自由さを感じていた。また、食物アレルギー対応力は、母親の健康状態、家族の健康状態、育児以外の生活全般上のストレスと共に母親の QOL の予測因子であることが明らかとなった。

母親の看護師に対する認識について、アレルギー専門小児科診療所の看護師については、母親の約 5 割が心情理解や除去食の情報提供などのサポートを受けたとし、食物アレルギーについての知識も約 8 割弱の母親があると評価していた。一方、総合病院小児科、一般小児科診療所の看護師によるサポートについては約 1~4 割程度の評価で、知識については約 3~6 割弱の母親があると評価していた。食物アレルギー対応力の高い母親は低い母親よりも、看護師は食物アレルギーについての知識があり、心情を理解し、除去食に関する情報を提供してくれると捉えていた。

以上の結果より、母親の食物アレルギー対応力を診断後早期のうちに向上させるために、看護師は食物アレルギーの正しい知識を持ち、母親の置かれている状況や心情に関心を寄せ、適切な情報を提供する存在であること、個々に合わせた食品や献立の紹介、利用できる外食店など、栄養士と連携した具体的な情報提供を行うこと、心理士と連携して母親のストレス対処の力を引き出すこと、母親が夫と協働できるよう、受診に夫も同席することを勧めたり、食物アレルギー児の養育には夫の協働が欠かせない旨が伝わるパンフレットを用いるなどの介入を行う必要性が見出された。また、医師により適切に除去解除が進められていくためにも、母親の継続した受診をサポートしていく必要があることが示唆された。

(2) 小児看護に従事する看護師の食物アレルギーに関する知識と食物アレルギー児の家族への看護実践、認識の実態

【方法】

小児科を標榜するクリニックに勤務する看護師を対象に、無記名自記式質問紙調査を行った。質問紙は A 地方の小児科を第一、第二診療科として標榜するクリニックに配布し、郵送法で回収した。

調査内容は、食物アレルギーに関する知識(19 項目)、食物アレルギー児の家族への看護実践(15 項目)5 件法(スコアが大きいほど知識・実践度は高い)を実施した。分析は、施設等による比較は Mann-Whitney の U 検定、知識と実践の関連は Pearson の相関係数を求めた。

【結果】

回答者は 114 名(回収率 19.7%)で、看護師 72%、准看護師 25%、看護経験は平均 20.5 ± 9.2 年だった。主な施設は一般小児科 88.6%、アレルギー専門小児科 7.9%で、全体の約半数は食物アレルギー児の家族に対する看護経験があった。食物アレルギー児の家族への看護の必要性は、約 8 割が必要であると回答し、約 6 割が食物アレルギーについて学習する機会があれば参加したいとしていた。しかし、実際に食物アレルギーに関する研修会や学会等に積極的に参加しているものは約 1 割であった。

食物アレルギーの知識は、アレルギー専門小児科 4~5 点、一般小児科 3~4 点、看護実践は、アレルギー専門小児科 2~4 点、一般小児科 1~3 点で、ほとんどの項目において有意差を認めた。しかし、「祖父母の食物アレルギー理解や両親の協働への支援」、「家族会の紹介」については全体的に 1~2 点と低かった。食物アレルギーの知識と、食物アレルギー児の家族に対する看護実践は、ほとんどの項目で中等度以上の相関を認めた。

以上の結果から、小児科クリニックに勤務する看護師の食物アレルギーに関する知識、ならびに看護実践は十分とは言えず、特に「食事療法に関する理解」が十分ではないことがわかった。栄養士がかならずしも勤務しているわけではないクリニックでは、家族の負担や不安を軽減するためにも、看護師が献立の工夫や食材などに関して一定の知識を持つ必要がある。そして、食物アレルギーについて学ぶ意欲はあるが研修会等への参加が少ないため、学習機会の確保に工夫が必要であることが示唆された。

(3) 小児アレルギーエドゥケーターによる食物アレルギー児の家族に対する看護

【方法】

日本小児臨床アレルギー学会認定の、高度なアレルギーの専門知識と指導技術をもったメディカルスタッフである「小児アレルギーエドゥケーター」として 3 年以上の活動実績がある看護師 8 名を対象に、40~50 分の半構造化面接を行った。面接内容は、食物アレルギー児家族へ

の看護として実践していること、工夫、大切にしていること等であり、許可を得てICレコーダーで録音し逐語録を作成した。分析は逐語録から食物アレルギー児の家族に対する看護についての語り部分を、意味内容を損なわないように抽出し、コード化した。さらに類似性によりカテゴリー化を行った。

【結果】

小児アレルギーエドゥケーターによる食物アレルギー児の家族への看護は、75コード、29サブカテゴリー、9カテゴリーで構成されていた。以下、サブカテゴリーは、カテゴリーは< >で示す。小児アレルギーエドゥケーターは、症状への不安や恐怖を感じながら管理を行う母親の気持ちを気遣うことや、母親の対応を認めるなど、<母親への受容的対応>を行い、成長後の生活をイメージできるようにするなどの<先を見越したサポート>や、原因食物を継続して食べる意義を伝える、原因食物を食べさせる気持ちを引き出すなどの<食べるためのサポート>を行っていた。また、食物経口負荷試験の前、中、後の<食物経口負荷試験のサポート>や、症状への対処方法を説明する、必要以上の除去にならないようにするなどの<食物アレルギーに対応するための教育>と、<祖父母の理解を得るためのサポート>を食物経口負荷試験の機会などを活用して行っていた。そして、受診時の母親の様子などからサポートの必要性を判断する、医師の説明の補足をするなどの<医師との連携>や、献立の工夫や食べ進め方について、栄養士に相談して母親に伝えるなどの<栄養士との連携>、<看護スタッフとの連携>を行っていた。

以上の結果より、小児アレルギーエドゥケーターは食物アレルギー児の家族に対し、疾患に対する不安を抱えながら食生活管理を継続する負担やストレスを受けとめ、数年先を見据えたサポートを他職種と連携して行っていた。これらは、家族が食物アレルギー対応力を獲得する上で重要な看護である。現在、食物アレルギーの治療は、原因食物を避けるのみでなく、個々の状態に合わせて少量でも摂取していく「必要最低限の除去」が原則となっている。そして、研究的な取り組みとして経口免疫療法を行う事例も増加していることから、今後より一層、本研究の小児アレルギーエドゥケーターが行っていたような、食べることとそれに伴う負担の軽減、ならびに安全への看護が重要となることが示唆された。

(4) 食物アレルギー児家族の看護ケアを実践するための看護師教育プログラム

(1)~(3)の結果をもとに、食物アレルギー児の家族の食物アレルギー対応力を養うことを目的とした看護ケア方法を考案し、看護師教育プログラムを作成した。

【教育目標と教育内容】

1) 食物アレルギー児の家族へ看護ケアを実践するための基本的知識・技術が習得できる。

疾患の理解：病態、症状、原因食物

診断と治療の理解：血液検査・食物経口負荷試験の目的、方法、注意点、原因食物の除去・解除についての医師の判断、原因食物の必要最小限の除去、生活管理指導表

症状対処の理解：原因食物の誤食時の対応、出現する症状に応じた対応、アナフィラキシーショックの対応、アドレナリン自己注射使用のタイミング・方法、

食事療法についての理解：食物除去による献立・調理方法・工夫、利用できる食材・入手方法、不足する栄養素の補足、外食等の注意点

2) 食物アレルギー児の家族へ看護ケアの具体的内容が習得できる。

ストレスに対処できるための支援

・母親の話をよく聴き、自分のストレスを適切にコントロールできるよう支援する。

・家族会など、経験者と話す機会を提供する。

・家族構成員の健康状態に注意を払い、予防的に介入する。

食物アレルギーを正しく理解し、安全に管理できるための支援

・原因食物、症状の出方、症状出現時の対応方法、治療（必要最小限の食物除去）などについて正しく理解できるよう、パンフレットなど視覚教材を活用しながら丁寧に指導する。

・食事療法を継続するための知識・技術（具体的な献立例、代替・加工食品の利用など）を身につけられるよう、パンフレットなど視覚教材を活用した指導や、調理実習の機会を提供する。

食物アレルギー児の成長や除去解除の過程を見越した支援

食物経口負荷試験を安全に受けられるための支援

家族が協働できるための支援

・母親が夫の協働を得ようとする思考やスキルを身につけられるよう支援する。

・父親が食物アレルギー児の養育を母親と協働できるよう、上記の食物アレルギーを正しく理解・管理するための支援を行う。

・祖父母が両親をサポートできるよう、上記の食物アレルギーを正しく理解・管理するための支援を行う。

医療者から情報を得るための支援

チーム連携による支援

今後は、考案した看護ケアを実施・評価し、食物アレルギー児の家族エンパワメントモデルを開発する。併せて本プログラムに基づいた教育を実施・評価し、看護師エンパワメント教育モデルを開発することを課題とする。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

Satoko Aika , Misae Ito , Yachiyo Yamamoto : Food allergy response capabilities of mothers and related factors . Nursing & Health Sciences 19 : 340-350 , 2017 (査読有)
DOI: 10.1111/nhs.12351

秋鹿都子、山本八千代、竹谷健、黒坂文武、亀崎佐織 : 食物アレルギーを有する子どもを養育する母親の Quality of life に関する検討 . 日本小児アレルギー学会誌 29(2) :169-180、2015 (査読有)

[学会発表](計3件)

秋鹿都子、山本八千代、伊東美佐江、宮城由美子、森山美香 : 中国地方の小児科クリニック看護師の食物アレルギーに関する知識と看護の実態、日本小児アレルギー学会、岡山市、2018.08

Katherine Heinze、村上京子、秋鹿都子、伊東美佐江 : 交流集会「親のゆらく意思決定のプロセスへの支援」、第21回日本家族看護学会学術集会、倉敷市、2014.08

Satoko Aika , Misae Ito : Correlation Between Food Allergy Response Capabilities of Mothers Who Raise Children with Food Allergy and the Quality of Life. Sigma Theta Tau International's 25th International Nursing Research Congress , Hong Kong , 2014.07

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名 : 山本 八千代
ローマ字氏名 : (YAMAMOTO , yachiyo)
所属研究機関名 : 北海道工業大学
部局名 : 医療工学部
職名 : 教授
研究者番号 (8 桁) : 10295149

研究分担者氏名 : 宮城 由美子
ローマ字氏名 : (MIYAGI , yumiko)
所属研究機関名 : 福岡大学
部局名 : 医学部
職名 : 教授
研究者番号 (8 桁) : 20353170

研究分担者氏名 : 伊東 美佐江
ローマ字氏名 : (ITO , misae)
所属研究機関名 : 川崎医療福祉大学
部局名 : 医療福祉学部
職名 : 教授
研究者番号 (8 桁) : 00335754

研究分担者氏名 : 森山 美香
ローマ字氏名 : (MORIYAMA , mika)
所属研究機関名 : 島根大学
部局名 : 医学部
職名 : 講師
研究者番号 (8 桁) : 50581378

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。